

リスタートで世界最強

ダマカツス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日の夕方の河川敷、南雲夫妻は不思議な迷子の（？）少年に出会った。

名前を聞いても分からない。

お家を聞いても分からない。

困り果てた南雲夫妻は決断した。

「もうこうなつたらウチの子にしちゃうか！」

「そうね！ そうしましよう！ ハジメ、あなたにお兄ちゃんが出来たわよ！」

「わ～い！ ハジメにおにいちゃーん！」

なんかそんな感じであっさり家族に迎えられた少年は、やがて大きく成長し異世界召

喚に巻き込まれ世界最強へと至る。

処女作です。

結構いきついで書いてます。

導入からツツコミどころ満載ですが深くはツツコまず、広い心を持つてお読みください。

※恵里救済済みのタグを追加しました。

目次

第一章

コナタ君、プロローグですよ |

日常の終わりですよ |

異世界召喚？いいえ、誘拐ですよ

30

11 1

コナタ君サイテー！ですよ |

ステータス公開ですよ |

63 46

第一章

コナタ君、プロローグですよ

——月曜日。それは誰もが逃れられない恐ろしい奴の名である。

少年——南雲コナタが微睡みながらそんな認識をしていると、布団がゆっくり何者かにはがされる。

目を開けた先には、ナチュラルボブカットの黒髪眼鏡女子。数年前から南雲家の一員として共に暮らす、幼馴染であり家族でもある少女、中村恵里がコナタの顔を覗いていた。

「やあ、おはようコナタ。はい、おはよーのちゅう……うぶつ」

「残念ながら、当方おはようのチューは受け付けておりません。……おはよう恵里」

挨拶ばかりの軽いノリでキスをかまそとする恵里に対し、コナタは慣れた動作で、枕元の本を取り自分と恵里の間に差し込んでそれをガードした。

「もう……つれないなあ……。ダメじゃないか、ちゃんと受け取つてくれないと。かわいい幼馴染女子からのおはちゅーを受け取るのは、幼馴染男子の特権であり義務でもあるんだから」

「すごい暴論を聞いた気がする。聞いたことねえよそんなの」

一切の動搖も見せず普通に挨拶を返し身を起こせば、恵里が若干恨めし気に見つめてくる。割と無茶苦茶なことを言いつつ、可愛らしくむくれてみせる幼馴染に苦笑を禁じ得ない。

「ていうか毎度毎度、突然キスしようとしてくんのやめーや」

「それは仕方ない、発作みたいなものだからね。乙女心は時として猛禽類になるものさ」

「なにそれこわい」

そんな朝の軽いやり取りを済ませると、「それにしても」と恵里が呆れ交じりに部屋を見渡すのでコナタもそれに倣う。

視線の先には本、本、本の山。壁一面に設置してある本棚からあぶれた数百冊はある本が、部屋の床や勉強机などを侵食するようになづ高く積み上がっていた。なるべく邪魔にならぬよう纏められてはあるが、一山でも崩れようものなら部屋の中は大惨事待つたなしである。

「また随分増えたねえ」

「増えちやつたなあ」

「そんな他人事みたいに……」

呆れ顔をさらに強め、視線と言う名の弾丸を浴びせる恵里。視線が突き刺さり心持ち

居心地悪くなつたコナタは、顔を明後日の方向に背ける。

まるでイタズラがばれた子供か犬猫のような反応を見せる彼の仕草に、今度は恵里が苦笑を浮かべながら肩を竦めた。

「ま、コナタのビブリオマニアは今に始まつた事じやないからね。でもなんとかしないと、また董さんに怒られるんじやない？」

「そーなあ……。レンタルボックスをもう一部屋……いや、もういつそのこと家のどこかに図書室を増築した方が色んな無駄が省ける気も……」

「そこで手放すつて選択肢が出ないのも君らしいよ……。それと、もし増築するなら、愁さんと董さんの二人にはちゃーんと相談するようにな」

「わかってるさ」

彼の頭に手持ちの本を減らすという考えは更々ないらしく、都合十部屋目となる倉庫を借りるか——それどころか家を増築する算段すら講じ始める始末。筋金の入つた愛書家っぷりには、もはや呆れるやら感心するやら。

「どうろで——」

幾つかの案をどれが一番効率的か頭の中で整理していると、ふと恵里が表情を真剣なものに変え、話の転換を促してきた。なので一旦思考を止め、彼女の言葉を待つ。

「体調はどう？　今日は見たとこ大丈夫みたいだけど」

「ああ。問題ねえよ」

「……本当に？・」

確認の言葉に答えて見せるも、恵里はコナタの言葉をすぐには受け止めず、目を疑り深く細め顔を見据えてきた。その目はさながら真贋見極めんとする鑑定士の様だ。それから暫し、納得できたのか表情を緩め安心したように微笑んだ。

「ん、だいじよぶそうかな」

「……いや、だからそう言つたろ？ つたく、信用ねえの……」

「当然！ 君には嘘をついた前科があるのでから！」

「……そうだつけか？」

「そうだとも！」

自分の言葉をすぐには信じてくれないと、あんまりと言えばあんまりな恵里の態度に、ジト目を向け拗ねた様に唇を尖らせるコナタ。しかし直後にビシッ！ と力強く指を指され論破されれば、掌返したようにすつとぼけてそっぽを向いた。

因みに、微妙に責めるような物言いをしている恵里だが、その実言う程怒つてはいない。その証拠に、軽くため息を吐き「まったくしようがないんだから」と間もなく頬を緩ませる。

「それよりほら、特に問題ないならそろそろ準備しないと！ もう朝ご飯の支度はでき

てるから、隣の寝坊助さん起こして着替えたら降りてきなよ」

恵里はすでに制服姿だ。この部屋には身の回りのこと含め、すべて片付け終えてから来たのだろう。行動にそつがなく頭が下がる思いである。

「マジか……。悪い、手伝わなくて……」

「ふふつ、僕が好きでやつてることだからいいさ」

ばつが悪そうに謝るコナタに、彼女はさして気にした風もなく楽しそうに笑い、足取り軽く部屋を出ていった。

恵里が出ていくのを見届けた後、やつてしまつたと言うように頭を搔くコナタ。
「昨日は少し夜更かししそぎたな……。ネタがどんどん湧いてくるから、つい時間を忘れちまつた」

無類の本好きであると同時に、実は彼自身も“東雲彼方”的作家名で、中学一年時のデビューから現在まで多数のヒット作を生み出す新進気鋭の小説家だつたりする。

昨日はかなりノツついて、次々と湧いてくるネタを逃さぬようメモに書き留めていたら、かなりの時間が経つてしまっていたのだ。

時計を確認したところ、時間にそこまで余裕はない。恵里の言う通り、あまりのんびりはしてられなさそうだ。

「ハジメー、起きろー！ 朝だぞー！」

「う、うーん……むにやむにや……」

「こちらに身を寄せ気持ちよさそうに寝息をたてる、隣の寝坊助さんこと妹の南雲ハジメを起こしにかかる。しかし、呼べど搖すれど起きる様子はない。

「起きろっての。遅刻すんぞ？」

「…………まだ、ねむ…………くう…………」

「…………はあ、仕方ねえ…………」

昨日ハジメは遅くまで売れつ子少女漫画家である母の作業を手伝っていたので、普通に起こすのはなかなか骨が折れそうだ。

そう思い小さく溜息を吐くと、どこからともなく紙を取り出すコナタ。

そして徐にそれをハジメの口許に近づけていく。すると、途中で紙が意思を持つたかのように彼女の口に吸い付いた。

一見何の変哲もない——いや、実際どこにでもある紙なのだが、まるでガムテープを彷彿させるほどピタリと密着し、簡単には剥がれそうにないのが分かる。

「んで鼻も摘んでつと」

口を塞いだ後に鼻も指でつまむことで、完全に呼吸をシャットアウト。

「く、う…………うぐっ!? む、むぐぐぐー!?

そうしてすぐに息苦しさを感じたのか、ハジメがジタバタし始めた。口許に引っ付い

た紙を剥がそうとするも、どうやら完璧に密着しているようで剥がれる気配はない。目が覚めたのを確認したので手を離す。同時に紙の方も、ハジメがどれだけ頑張つても剥がれなかつたのが?のように呆気なく離れた。

「ふはっ! はあつ、はあつ……もおおく! ひどいよお兄ちゃん!! あんな起こし方!」

「いくら起こしても起きないからだろ」

「だからって力まで使う!? 鬼! 悪魔! 鬼いちゃん!」

「そこ鬼と悪魔だけで良くね? なんでわざわざ俺を加えだし。てかお兄ちゃんのニュアンス、なんか変じやなかつた?」

「氣のせいだよ!」

「さいですか」

ボクは怒つてます! とばかりに胸をぽかぽか叩いてくるハジメ。コナタは両手を高く上げ、されるがまま。

しかし再度時計を確認したところで、いよいよ時間に余裕がない事に気付いた。

「つて、そんな場合じやねえつて。そろそろ支度して飯食つて出ないと、マジで遅刻しちまう」

「もうつ! ……じゃあ、はい」

まだ微妙に拗ねた様子のハジメはそう手短に言うと腕を広げ、何かを待つポーズをとる。

「アレしてくれたら許してあげる」

「……はあ、つたくもう。この甘えん坊将軍は……」

早く早くと期待を多分に含んだ目でせがんでくるハジメに、呆れと微笑ましさが四：六で混ざったような表情をして、彼女ご希望のアレ——ハグをしてやる。

右手でゆっくり髪を梳くように撫でつけ、左手で背中をポンポンと優しく叩く。

「ん…………えへへ～」

それだけのことでハジメの表情が半端じやないほど蕩けだした。彼女の顔は、まさに今幸せの絶頂にいる、とでも言いたげな程ゆるつゆるだ。そんな顔をされては、こつちまでつられて頬が緩んでしまう。

「どうだ？　満足したか？」

「んう…………うん、満足！　じゃあ、ボクも支度してくるね！」

「おう、そうしろ」

どうやら満足したようで、ベッドを降り部屋を出て――

「あ、そうだ！」

行こうとした直前、何かを思い出したのか立ち止まって振り返る。そんな彼女に、何

事かと首を傾げるコナタ。

「おはよう、お兄ちゃん！」

どうやら挨拶するのを忘れていた、ということらしい。目をしばたかせ、一、二秒キヨトンとしていたコナタもすぐに表情を緩め――

「ああ、おはようハジメ」

笑顔で挨拶を返した。

今度こそ満足して、ハジメは自室に戻っていく。

昔から変わらない妹のブラコンぶりに思わず苦笑が漏れる。まあ血が繋がつてない上に、思春期真っただ中とも呼べる年頃になつた今でも、変わらずお兄ちゃんと慕つてくれるのは兄冥利に尽きるというもの。だからこそ、つい甘やかしてしまうのだが。

「……ふう」

自分以外誰もいなくなつた部屋。静かに一つ、息を吐く。

大好きな家族との、変わらない朝の一時を噛み締めることで、睡眠時の記憶を無理やり流し去る。

そうすることで、起床時から今まで、少しづつこみ上げてきていたモノを押し込んだ。
（ま、やらかしちゃいないんだから、別に嘘ではねえよな？）

屁理屈じみた言い訳を心の中で延べ、しかし心配してくれた恵里には、やはり心の中

不快感

で一言謝つておく。

「…………よし！ 今日も一日、がんばるぞい！」

気持ちを切り替えるようにお気に入りのアニメのセリフを口ずさんで、コナタは部屋を後にした。

日常の終わりですよ

「……はあ」

学校まであと数分で到着、といったところでハジメが憂鬱気に溜息を吐く。もちろん今日が月曜日ということもあるが、今の溜息の理由は他にあった。

「あんま気にし過ぎても良いことないぞ、ハジメ」

「そおそつ。チキン共の目なんて気にするだけ無駄つてものだよ」

溜息の原因を知る二人が、ハジメに気遣いの言葉を投げかける。しかし二人ほど胆力のない彼女は、フォローの言葉にも複雑な顔を返すのみ。

「無理だよ……。ボク、二人みたいに団太くないもん……」

「団太いて……」

「ひどい言われようだねえ」

心臓に毛が生えてるのではと思う程気丈な二人を心底羨ましく思いながら、ハジメは少し先の未来を想像して再び溜息を溢す。流石にこの悩みばかりはどうにもならないので、二人して苦笑交じりに頭を撫でてやるぐらいしかできなかつた。

そうこうしているうち、学校に到着。緊張で委縮しているハジメの盾となるため、コ

ナタ、ハジメ、恵里の順で扉を開け教室に入る。

その瞬間、教室内の目が全て三人に注がれた。その目は一部を除き、お世辞にも友好的なものとは言えない。無関心ならまだいい方で、大半が侮蔑や畏怖など、負の感情が込められたものだ。

中でも一際強い敵意の籠つた視線がある一点から感じ、コナタはその方向、四人の男子が群がる場所を一睨みした。すると、鋭い瞳を返された四人組の男子は一転顔を青くし、すぐさま目を背けた。ついでに四人組程でないにしても、まだ睨んでくる他のクラスメイトにも軽く鋭い視線を返すと、こちらも揃つて顔を背けた。

敵意だけは一端な臆病者に鼻を一つ鳴らして、以降一瞥もせず歩き出す。後ろからハジメがコナタに追従するように、恵里は堂々と自席に向かう。

もはや学校がある日の恒例ともいえる光景。ハジメの溜息の原因はこれである。そもそもなぜ彼等はクラスメイトに敵意を向けられているのか。

その答えが彼女だ。

「南雲君、ハジメちゃん、恵里ちゃん、おはよう！」

「おっす白崎。おはようさん」

「お、おはよう……白崎さん」

「おはよー香織」

「南雲君、今日は体の調子いいんだね！」

「おう、今日は絶好調だ」

「なんだ！ よかつたあ……」

朗らかに挨拶をしてきた彼女の名前は白崎香織。

腰まで届く長く艶やかな黒髪、顔のパーツも配置も完璧と言つていいバランスで整い、性格面も学年問わず頼られるほどの懐の深さを持ち合わせている。

この学校において二大女神と呼ばれ、男女問わず人気を集めている美少女だ

そんな絶大な人気を誇る彼女は、なぜか三人——特にコナタをよく構う。それがクラスの者達には面白くないらしい。

ハジメは夜寝るのが遅く、授業中に居眠りすることが多い。恵里は居眠りこそしないし、当てられればそれに答えもあるが、基本やる気なく授業をこなしている。

そしてコナタだが、彼は特に良くない噂が流れていた。曰く十数人の不良を血祭に上げた。二週間に一回は必ず体調不良を理由にして学校をサボる。老人の荷物を搔つ攫おうとしたetc…

言つておくと、噂はほぼほぼでつち上げである。とある人物がそうだと決め込んだことを、彼を糾弾する際に吹聴して流れた、9割方嘘で構成された噂が大半だ。因みにその人物は嘘を吐いている自覚はない。その人物にとつて、コナタはそういう奴だと確信

まこと

していることから、自分がそうだと感じたそれは全て真の出来事なのだ。

そして周囲もコナタへの第一印象と、^{コナタ}彼自身がそれを否定しないことから、その人物の言葉を真に受け彼を危険な不良として捉えている節がある。

これらのことから、不良学生として見られている三人が、香織のような優等生に積極的に話しかけられるのが許せないのだ。

「まつたく、毎日毎日鬱陶しいつたらいいよね。別に授業中どうしてようと、こつちの勝手でしよう」

香織と挨拶を交わすことで、再び視線が纏わりつく。恵里も流石に鬱陶しそうだ。

これで成績が悪かつたりするなら確かに不真面目とも取れる授業態度は問題だが、彼等の成績は三人共平均より遥かに上であり、本来そんな目を向けられる筋合いはない。

しかしながらこの成績に関しても、件の人物に「真面目に授業も受けてないのに良い成績をとれるはずがない」と意味不明な因縁をふつかけられインチキの誹りを受けているし、それ以前に香織が積極的に構つてくる以上、やつかみは避けられないことも理解している。言うなれば一種の有名税だ。

だからどうというわけでもない。直接手を出すことも無ければ、面と向かつて何かを言う勇気すら無い、遠巻きに睨んでくるだけの、所詮は臆病者の集いである。ハジメは彼女の性格的に難しいだろうが、やつかみなどコナタや恵里は鬱陶しいと思うことはあ

れどほんとにしない。勝手にやつてろのスタンスだ。

何もしてこないなら、こつちも無関心を貫く。逆に、家族に害を及ぼすというなら容赦なく潰す。それがコナタの心構えだった。

(しつかし、白崎はなんでこうも俺に構つてくるかね?)

コナタのことを気遣つて、というのもあるだろうが、それとは別の目的も窺える。なんか視線が熱いというか、熱に浮かされてるのが見え隠れする時があるというか。

(まさか学校では不良で通つてゐる俺に恋愛感情を抱いてる、なんてことはないと思うが……)

そんな考え方をしてゐ内、四人の男女が近づいてきた。

ハジメの表情がさつきより曇り、恵里が露骨に嫌そうな顔をする。コナタも顔には出さないが面倒な奴が来たと思つた。

「三人共おはよう。毎日大変ね」

まず苦笑しながら挨拶をしてきたのが、二大女神のもう一人である八重櫻雪。

実家が剣道の道場で、百七十二センチと女子にしては高い身長に引き締まつた体つきをしている、ポニー・テールが特徴の女の子だ。香織とは幼馴染の間柄。

凛とした雰囲気と面倒見の良さから、彼女も熱狂的なファンが多く、特に後輩の女子から熱い視線を浴びては、『お姉様』などと呼び慕われている。

生真面目な性格が災いしてか、人一倍気苦労の多い、コナタ曰く泣けてくるほどの苦勞人だ。

「コナタン、ハジメン、エリリン、おつは〜！」

次に元気よく話しかけてきたのは、中学で友達になつた谷口鈴。

身長百四十ちよいの小柄なムードメーカーで、心におつさんを飼い慣らし、時々暴走する困つたさんだ。

最初の頃は主に恵里とひと悶着あつたりもしたが、今ではすっかり仲がいいフレンドリー娘である。

「香織、また三人の世話を焼いているのか？　まつたく、本当に香織は優しいな」

そしてこのやたらキラキラした、優し気な笑みを香織に向け臭い台詞を放つたのが、香織と雪の幼馴染。名を天之河光輝という。

容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能の完璧超人で、香織と同じくほとんどの教師や生徒から信頼を集めている。

恵里とハジメが表情を変えたのは彼が原因だ。彼女達は彼の本質というか致命的な欠点を知っている。その為、彼女達にとつては正直絶対に関わりたくない部類の人間なのだ。

「全くだぜ。そんなやる気ない奴らにやあ何言つても無駄と思うけどなあ」

最後に投げやりな調子で光輝に同調した男が、光輝の親友の坂上龍太郎。

身長がコナタとほぼ同じ百九十センチあり、熊のような体つきをした絵にかいたような脳筋である。

やる気のない人間が嫌いらしく、基本的に彼等に興味がない。逆もまた然りではあるが。

「あはは……おはよう八重樫さん、谷口さん、天之河君、坂上君……」

「おはよう八重樫、谷口」

「おは、雲、鈴」

とりあえず、挨拶をしてきた雲と鈴には挨拶を返しておくコナタと恵里。それを逃さず、光輝がすかさず問いかける。

「……南雲兄、中村さん。なぜ雲と鈴にしか挨拶をしない。俺達だつて挨拶したんだからちゃんと返すべきじゃないか？」

「はえ、あれ挨拶だつたんだ。分からなかつたよ」

「まあ世間一般じや、あれを挨拶とは言わんわな」

コナタと恵里の屁理屈に光輝の表情が硬くなる。自分はちゃんと挨拶したのに、言い訳ばかり並べまともに挨拶を返さない二人に良い気分はしないといったところか。

「それより南雲、君はいつまで香織の優しさに甘える気だ？ わざわざサボる口実に体

調不良なんて同情を買うような言い訳をして。いい加減その適当な性格直したらどうなんだ？ 香織だつて君にばかり構つていられないんだから」

挨拶の事はもういいとでもいうように話を変え、コナタを注意する光輝。その口ぶりは、コナタが噂通りサボつているのを信じて疑つていらない様子だ。

いや、噂を信じているというのは少し語弊がある。なにせ件の人物、コナタの悪評とも呼べる噂の発信源は、他でもない光輝だからだ。

天之河光輝という人間の致命的な欠点。

それは自分が一度正しいと信じた事を疑わない。自分がそう信じたのなら、周りの人間も同じ考えのはずだと勝手に解釈してしまう。つまり結果的に自分は絶対に正しいという、その傲慢な性格にある。そして、その傲慢を光輝自身は自覚しないというのも質が悪い。

また、さらに質が悪いのが、この傲慢さが世間でまかり通つてしまつことがある。無駄に高いカリスマのせいで、彼の出した答えがたとえどんなに歪なものであつたとしても、他の者達は深く考えもせずそれに同調してしまう。これも光輝のご都合解釈をさら助長させる原因と言えよう。

もちろんコナタは——コナタだけでなくハジメも恵里も、香織に甘えた覚えなど一度だつてない。だがそんな事、光輝には関係ないのだ。なぜなら、コナタに放つた自分の

言葉こそが“正しい”的だから。

それを理解しているコナタは、彼の言い分に対し反論はしない。すればするだけ、実りの無い押し問答で貴重な時間が無駄になるのは明白だ。なのでただ肩を竦めるだけに止めておく。

が、そんな態度すら納得いかないのか、光輝がコナタに再度小言を言おうとしたところで――

「？ 光輝君なに言つてるの？ 私は、私が三人と話したいから話してるだけだよ？ それに、体調が悪い人を心配するのは当然でしょ？」

香織が無自覚の爆弾を落とした。

教室がざわつく。男子たちの目が呪い殺さんとばかりに強くなつたことで、ハジメが小さく悲鳴を上げコナタの背にしがみつく。

「え？ ……ああ、ホントに香織は優しいな」

どうやら光輝の中では香織の発言は、あくまでコナタ達を気遣つてのもの、と変換され解釈されるようだ。

(重症だな。幼馴染の言葉すらも疎に聞き入れないんだから。なんとも厄介な奴に目をつけられたもんだよ、白崎も――)

「ごめんなさいね。彼も悪気はないのだけど……」

(この子もな)

八重櫻

「この中では一番人間関係や各人の心情に敏感な零が申し訳なさそうに謝罪してくる。

「あはは……しようがないよ。天之河君が言いたいこともわかるから」

(できれば放つておいてほしいんだけどね……)

「別に零が謝る必要はないでしょ？ 僕等は気にしてないよ」

(どうせアレには、何言つても無駄なのは分かつてゐるし)

「……そう言つてもらえると助かるわ」

ハジメと恵里に逆に気を遣われて苦笑いを返す零。顔には疲れというか、哀愁が漂つてゐるように感じた。とても青春を謳歌する女子高生がする顔じゃない。

彼女はどれだけ、光輝が首を突っ込んで自分は解決したと思いつ込んでる未解決の問題を、裏でなんとかしてきたのか。

(あつちへこつちへと、必死に頭を下げて回る姿が簡単に浮かぶな。本つ当たり泣けてくる……)

こうも苦労してると、ちよつとお節介も焼きたくなるというもの。

「八重櫻こそ苦労してるだろ？ 愚痴とかなら喜んで付き合うから、何時でも言いなよ」「え？ ……で、でも南雲君だつて……」

「俺は心配いらねえよ。八重櫻だつて女の子なんだし、ストレス溜めるとキツイだろ？」

無理強いはしないけど、頼りなくなつたら頼れ。つつても、愚痴聞いてやるぐらいしかできないんだけどな?」

肩を竦めて、少しだけおどけた口調で最後の言葉を補足する。秉の抱え込みやすい性格を鑑みると、真面目な口調一辺倒より多少おどけてみせた方が、「愚痴に付き合つてもらうのは迷惑なんじや……」という心のハードルを下げられるのでは? という考え方だ。

「……ふふつ、それで十分よ。……えつと……それじゃあ、その時はお願ひできるかしら

?

「おうよ」

どうやらうまくいつたらしい。さつきまでの申し訳なさそうな顔ではなく、柔らかい笑顔を見せてくる。

コナタ達はあと二年もすれば光輝と離れられる。けど、幼馴染の二人はそうもいかない。下手すれば、この先もずっと付き合いは続いていく。

このまま溜め込み続ければ、彼女はいずれ壊れてしまうかもしない。なら少しでも落ち着けるように、彼女の心をちゃんと支えてやれる男が現れるまで、自分が一時的な宿り木になるのも悪くないだろう。

(いや臭っさ! なんだ宿り木になるのも悪くないって! しかも上から目線で気持ち

悪っ!! 自分で自分に引くわ……っ!)

頭天之河かよ俺エ、とさり気に光輝デイスも入れつつ、内心の言動にダメージを受けるコナタ。

急に黙りこくつたコナタに雲が声をかける。

「南雲君? どうしたの?」

「あー、なんでもない。自分の痛さにダメージ受けてただけだ

「は、はあ……?」

何はどうあれ、これでようやく席に着ける。月曜日の朝つぱらから密度濃すぎではないか?

「はよ一つす南雲つ」

「おはよう南雲。朝から大変だな、お前も」

「はよー二人共。もう慣れだし、別に大変つて程じやねえさ」

席に着くと、前と右の席に座る相川昇と永山重吾が話しかけてきた。

彼等は鈴と同じく中学が一緒だつたこともあり、光輝の噂に流されることなく、気さくに話しかけてくる友人と呼べる者達だ。二人の他にも、あと何人か同じように接してくれる人はいる。

例えば――

「遠藤もおはようさん」

「お、おはよう南雲！」

この遠藤浩介もそうだ。挨拶をすると嬉しそうに返してくる。

なぜこんなに嬉しそうなのか？……それは。

「うおつ！？ 浩介、お前いつから……？」

「今さら！？ ずっといたし！！ てか挨拶しただろ！？」

「……すまん、気付かなかつた」

崩れ落ちる遠藤。

ご覧の通り、彼はとても影が薄いのだ。自動ドアが認識しなかつたり、存在すら忘れられることもあるつたりと、零とは別ベクトルで泣けてくる存在である。

だがコナタだけは、なぜか遠藤をほぼ確実に認識できるので彼からはすごく有難がられている。

「……平和だねえ」

遠藤たちのやり取りを横目に、読みかけの本を取り出し読み始める。
ページを送る合間に窓の外に目を向ける。空は雲一つない快晴模様だった。

四限目の授業が終わりようやく昼休みに入つた。

ハジメと恵里がコナタの席に椅子を寄せる。弁当を広げると彩り豊かなおかずが出迎えた。さつそく一口。

「うん美味しい！・恵里も料理上手くなつたよな」

冷めても味が損なわないよう細かい工夫が施された弁当をコナタが絶賛し、弁当を作つた恵里が誇らしげに胸を反らす。

「ふふん、でしょ～？」

「恵里もボクもいっぱい料理の勉強してるからね！」

南雲家の料理はハジメと恵里、ごく偶に母の董が作る。コナタも普通に料理はできるが、率先して二人が料理を担当してくれるので有難く任せることにしている。本を読む時間も増えるし、なにより可愛い妹や幼馴染の手料理を味わうのは、やはり男としては夢とロマンに溢れたものなのだ。

「三人共今日は教室でお弁当てるんだね！・私も一緒していいかな？」

弁当を食べていると、またも香織が人懐こい笑顔と共に昼食同伴の催促をしてくる。コナタとしては問題ないが、確認のためハジメと恵里に目を向けた。

「僕は構わないよ？」

「……ボ、ボクもいいよ」

「だとさ」

「ありがとう！」

二人とも了承の意を唱える。ハジメは若干の躊躇いがあつたが、視線が気になるのと、確実に厄介者が来ることを危惧しての反応だろう。しかしそこで反対しないのが、押しの弱いハジメらしい。

視線の方はコナタが座る位置を調整し、ハジメに向かないようにしてやる。

「でもいいのか？ いつもあいつらと一緒に食つてゐるのに」

「うん！ たまには他の人と食べるのもいいかなつて思つて！ ……それとね、今日、ちよつとお弁当作りすぎちゃつたんだ。南雲君、よかつたら食べてもらえないかな？ かな？」

そう言う香織の手には、女の子っぽい丸いフォルムの小さめな弁当箱とは別に、男物の無骨なデザインの弁当箱があつた。

狙つたような作りすぎ加減な気もするが深くは考えまい。腹には全然余裕があるし、ありがたくもらつておく。

「そうか？ なら遠慮なくもらうよ。サンキューな、白崎」

「うん！」

お礼の言葉に満開の笑顔を見せる香織。魅力的な笑顔だ。これは人気者になるのも

頷ける。

まあ再び空気が不穏になるが知つたことではない、と早速香織から弁当を受け取る。

が、それに待つたをかける人物が一人。

「香織」

「光輝君？」

そう、我らが正義の味方

厄介

（笑）、天之河光輝だ。

香織あるところ我あり！ といつた風体で現れた。

（確実にストーカーの素質あるだろ、こいつ）

彼の将来が本気で心配——にはならず、別に彼が将来的にどうなろうと自分には関係ないので、今はただ成り行きを見守ることにした。

「こつちで一緒に食べよう。南雲は妹と中村さんの三人だけで食べるのが良いみたいだしさ。それに、せつかくの香織の美味しい手料理を、他の料理の片手間に食べるなんて俺が許さないよ？」

「「…………」」

続く光輝の意味不明な発言に、三人揃つて言葉を失う。なんというか、痛々しいにも程があつた。

絶好調すぎる光輝節に、彼の頭の中は一体どうなつているのか、呆れと少しの興味を

覚えつつタコさんワインナーを頬張る。

「え？ なんで光輝君の許しがいるの？」

「ブフツ！？」

「ブツ！？ ゴホツゲホツ！？」

「だ、だいじよぶお兄ちゃん！？ お茶飲んで！」

「サ、サン、キュ、ハジメ……ゲッホ!!」

光輝の意味不明な発言をキヨトンとした表情で一刀両断する天然^{香織}さん。返答がなめらかかつ的確すぎて、恵里と零が思わず吹き出す。

コナタも慌てて口を手で塞ぎ、頬張つたばかりのタコさんワインナーが口から発射されるのを防ごうとしたところ、誤って飲み込み盛大にむせてしまふ。それを見たハジメがすかさずお茶を渡してくれる。気配りのできる妹で兄は嬉しい。

光輝は苦笑しながらも、なんとか香織をコナタ達から引き離そうと、臭いセリフを吐きながらしつこく食い下がる。

(……ほんとに痛いな。なにが痛いって、もう存在そのものが痛い。いつそテンプレな異世界にでも飛ばされないもんかね。そんな世界なら、どんなに存在が痛々しくても馴染めるだろうさ。たぶん……きっと……つて、ん？)

ハジメから受け取ったお茶を飲みながら、天井知らずな光輝の痛さに呆れかえつてい

ると、突如として光輝の足元に純白に輝く魔法陣が現れた。

「つ、なツ!?」

（――これは……ヤバい!?）
その異常事態にクラスにいた誰もが、その場から動かず魔法陣に視線を注ぐ。

「全員教室から出ろっ!!」

直感で危険を察したコナタが声の限り叫ぶ。だが誰も動かない。否、動けない。皆この状況に頭が着いてこないのか、金縛りにあつたかのように固まってしまっている。コナタの声も耳に入つてない様子だ。

やがてその魔法陣は徐々に輝きを増し、光輝を中心にして大きさを教室全体にまで広げていく。

異常が足元まで迫ると、ようやく硬直が解け悲鳴を上げるクラスメイト達。教室に残つて生徒と談笑していた先生が、先のコナタと同じく「教室から出て!」と叫ぶが無理だ。コナタ含め初動が遅すぎた……。

「ハジメ!
恵里ツ!」

「お兄ちゃん/
コナタ!?!」

間に合わない！

そう判断したコナタは、咄嗟にハジメと恵里の腰に腕を回し抱き寄せる。何が起きて

大切な家族
も、せめて二人だけは守つてみせると、抱き寄せた体を離すまいと腕に力を籠める。

それと同時に魔法陣の輝きが一層激しくなり、教室全体が真っ白に塗り潰され、視界も真っ白に染まつた。

光が治まつた頃、教室内は蹴倒された椅子、食べかけのまま開かれた弁当、散乱する箸やペットボトル、教室の備品だけがそのまま残されていた。

中にいた人だけが忽然と姿を消したのだ。まるで神隠しにあつたかのように。

異世界召喚？いいえ、誘拐ですよ

光の收まりを感じとり、ゆっくりと目を開けた。視界に映し出された景色はどう見ても、さつきまでいた教室じやない。

真っ先に飛び込んできたのは巨大な壁画。

後光を背負った金髪の中性的な顔立ちの人物が、背景として描かれている雄大な自然を、包み込むように両手を広げた様が描かれている。

一見すれば神々しい壁画だ。しかしこナタは全く別の感想を抱いた。

(気色悪い……)

まるでこの世界は自分の所有物だと主張しているかのようだと、薄ら寒い不快感を感じたのだ。長く見続けるのも精神衛生的によろしくないので、早々に絵を視界から外した。

「あ、あの……コナタ／お兄ちゃん……？」
「ん？…………あつと、悪い」

真下からハジメと恵里の声が聞こえ、二人の声がした方に目を向ける。

そこには頬を赤く染め、自分の顔を見上げる二人の顔。なんか距離近いなあと思つた

ら、庇うように抱き寄せたのを忘れていた事によく気付いた。

今すぐ何かが起ころうなことはなさそうなので、軽く謝りながら力を緩めて解放する。解放された二人は恥ずかしそうに居住まいを正しながらも、表情はどこか嬉しそうだ。

「皆混乱して動けない中で、君だけは咄嗟に僕達を庇おうとするなんて……。やつぱりすごいよ、コナタは」

「ほんとだね。お兄ちゃんと一緒だと、すごく安心する」

「……なはははっ。そりや褒めすぎだ」

彼があの時最小限の混乱で済んだのは、毎夜の体験のおかげだ。不可思議な体験を経験済みだからこそ、あんな謎の現象が起きてても、二人を庇うため咄嗟に動けたのだと思う。

（長年苦しめられてるものに“おかげ”なんてのは、ちょっとばっかし複雑な気分だ
……）

二人はだいぶ落ち着いてきたのか、コナタの制服の裾をちよんと摘みながら周囲を見渡し始める。そして壁画に目が行くと、ハジメは冷や汗を一筋流し、恵里は顔を顰めて絵から目を逸らした。恐らく先のコナタと同じ感想を抱いたんだろう。

コナタも気を取り直し、改めて辺りを見回す。

どうやら自分達は巨大な広間の最奥にある、台座のような場所の上にいることが分かった。台座の上にはコナタ達だけでなく、あの時教室にいた皆の姿もある。もちろん香織達も一緒だ。

あの時は本当にギリギリで、香織まで庇う余裕はなかつたため、彼女の無事を確認出来てホッとした。

さらに観察を続けると、彼等の乗る台座の前で三十人近い人が、まるで祈りを捧げるよう両手を胸の前で組んだ格好で跪いていた。

何かの正装なのか、金色の刺繡があしらわれた白い法衣で統一され、黄金の錫杖をその脇に置いている。恰好から見て教会の人間だろうか？

その内の一人、法衣集団の中でも一際豪奢で煌きらびやかな衣装を纏つた、七十代くらいの老人が進み出でてきた。

「勇者御一行様。ようこそ、トータスへ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシュタル・ランゴバルドと申す者。以後、宜しくお願ひ致しますぞ」

そう言つて、イシュタルと名乗つた老人は、好々爺然とした微笑を見せた。

厄介事の臭いしかしない状況に、コナタは人知れず溜息を吐いた。

程なくして、十メートルほどのテーブルが幾つも並ぶ大広間へと通された。上座に近い方に先生と光輝達四人組が座り、後はその取り巻き順に適当に座っている。コナタは最後方で恵里とハジメが彼を挟むように席に着く。

全員が席に着くと、絶妙なタイミングでカートを押しながらメイドが入ってくる。こんな状況でも思春期男子の飽くなき探究心と欲望は健在のようだ。クラス男子の大半がメイドを凝視している。

地球産の某聖地にいるようなエセメイドや外国にいるデツプリしたおばさんメイドじやなく、正真正銘、男子の夢を具現化したような美女・美少女メイドだし仕方ないことではある。

しかし男子は、いい加減女子の視線に気付いたほうがいい。目が絶対零度の冷たさを宿してゐるから。

だらしない顔を晒す男子の姿に、香織が「まさか南雲君も……!？」と気になつてゐる人物に目を向ける。

隣に座る零も香織の様子に気付いたのか、「まあしようがないわよね」と苦笑を浮かべながら、釣られたようにコナタを見やる。

しかし予想に反して彼女達の目に映つたのは、メイドには一切見向きもせず、鋭い双眸にイシュタルを映すコナタの姿だった。

(南雲、君……?)

まるで今すぐにでもイシュタルを射殺さんとせんコナタの威容に、香織と零は彼に別の誰かの影を見た気がして、思わず息を呑む。

「コナタは美人メイドさんに見惚れないんだね?」

コナタから目が離せずにいると、タイミングよく恵里がコナタに話しかけた。それにより恵里の方へ意識が向いたおかげで、コナタから感じた威容が薄まつた気がした。息苦しさを感じる。そこで初めて、自分たちが呼吸すら忘れてコナタを見ていたことに気付いた。

「確かに美人とは思うが、初対面のどんな人間かもわからん奴に見惚れたりしねえさ。そもそも可愛い顔なんて、毎日お前らを見てるから慣れっこだし」

「…………ばか」

「なんで馬鹿呼ばわりされたの、俺……?」

(見間違いかしら?)

さつきまでの威容が嘘のようなアホっぽい会話をしている彼を見て、先ほどの何者かの影は見間違いだと考えることに決めた零。隣を見ると、どうやら香織も同じような考えに至つたのか、平時の彼女に戻つていた。

「うう……ハジメちゃんと恵里ちゃん……南雲君とどんな話してるんだろう。……なん

か顔赤くなつてゐる？ 一体何を言われたの……!?」

「香織……あなた……」

……ちょっと調子が戻りすぎてやいないだろうか？

通常運転に戻つた香織に呆れ顔を浮かべる零。

(でも……)

恥ずかしそうな、それでいて嬉しそうな表情を浮かべるハジメと惠里。その様子を見て香織程ではないが、彼等がどんなことを話しているのか気になりやきもきしている自分がいることに、零は少しの戸惑いを覚えた。

(……まあ、私だつて女の子なんだし、そういうことにだつて興味は持つわよ！ うん！)

そうして誰にともない言い訳をして戸惑いの感情を誤魔化し、差し出された飲み物を、少しだけ感じる胸の靄を一緒に押し流すように口に含んだ。

全員に飲み物が行き渡つたのを確認したイシュタルが話し始めた。

話を要約すると、ここトータスという世界には、大きく分けて人間族、魔人族、亜人族の三つの種族がある。

この三つの種族の内、人間族と魔人族は何百年も戦争を続いている。

魔人族は個の能力に優れていたが個体数が少なく、人間族はこれに数で対抗することで戦力は拮抗していた。

しかし最近になつて、どういうことか魔人族が魔物を使役する術^{すべ}を手に入れた。今まで本能のままに活動する魔物を使役できる者はほとんど居なかつた。使役できても、せいぜい一、二匹程度だという。その常識が覆された。これの意味する事は、人間族側の“数”というアドバンテージが崩れたということ。つまり、人間族は滅びの危機を迎えている、と。

「あなた方を召喚したのは“エヒト様”です。我々人間族が崇める守護神、聖教教会の唯一神にして、この世界を創られた至上の神。おそらく、エヒト様は悟られたのでしよう。このままでは人間族は滅ぶと。それを回避するためにあなた方を喚ばれた。あなた方の世界はこの世界より上位にあり、例外なく強力な力を持ってています。召喚が実行される少し前に、エヒト様から神託があつたのですよ。あなた方という“救い”を送る。あなた方には是非その力を發揮し、“エヒト様”的御意志の下、魔人族を打倒し我ら人間族を救つて頂きたい」

大方、信託を聞いた時のことも思い出してるのか、イシュタルが恍惚としたキモイ表情を浮かべる。

なんでも人間族の九割以上が創世神エーリヒトを崇める聖教教会の信徒らしく、度々降りる神託を聞いた者は例外なく聖教教会の高位の地位につくらしい。

勝手な理由で拉致された上に、なにが悲しくてジジイの恍惚顔なんぞ挙まなきやなんのだと怒りを募らせるコナタ。差し出されたクソまずい紅茶擬きを、熱々の状態で鼻から注ぎ入れてやりたい衝動にすら駆られる。

だが、怒りに身を任せても実りは無いと、クールダウンして状況を冷静に分析するよう努める。

(ヤバいぞこの世界。あのジジイの恍惚顔と説明を聞く限り、この時点では教会の人間が狂信・妄信的な信者であることは、ほぼ確定だ。こんな奴ばかりとは思いたくないが、人間族の九割以上が信徒とか、かなり歪んだ世界じゃねえか)

この世界の歪さに戦慄してると、一緒に召喚に巻き込まれた畠山愛子先生が突然立ち上がり、猛然と抗議を始めた。

「ふざけないで下さい！ 結局、この子達に戦争させようつてことでしょ！ そんなの許しません！ ええ、先生は絶対に許しませんよ！ 私達を早く帰して下さい！ きっと、ご家族も心配しているはずです！ あなた達のしていることはただの誘拐ですよ！」

彼女は今年二十五歳になる社会科の教師で非常に人気がある先生だ。百五十七センチ

程の低身長に加えて童顔なこともあつて、見た目はよくて中学生にしか見えない。

理不尽な召喚理由に怒りを顕わにするが、如何せん迫力がなさすぎる。本人は背後に猛虎を背負つてるイメージなんだろうが、どう考へても無理がある。なんなら普通の猫の威嚇の方が迫力があるぐらいだ。

現にクラスメイトは「ああ、また愛ちゃんが頑張つてる……」とほっこりした顔で愛子を見る。和んでる場合ではないというのにだ。現状を理解できていないのか、できてるけどしたくないだけなのか……。

なんにしても無駄な足掻きだと、彼等は次のイシュタルの言葉すぐに思い知ることになる。

「お気持ちはお察しします。しかし……あなた方の帰還は現状では不可能です」
イシュタルの言葉に場が凍り付いた。

「ふ、不可能つて……ど、どういうことですか!? 喚べたのなら帰せるでしょう!」

「先ほど言つたように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんのでな、あなた方が帰還できるかどうかもエヒト様の御意志次第ということですな」

「そ、そんな……」

その言葉を最後に、愛子が脱力したように椅子に腰を落とす。周りの生徒達も口々に

騒ぎ始め、広間内は軽いパニック状態だ。

イシュタルはこの間、特に口を挟むでもなく静かにその様子を眺めていた。目の奥には侮蔑が込められているように見える。「エヒト様に選ばれておいて何故喜べないのか」とでも思っているのかもしれない。

この世界の人間でもないのに、この世界の神に選ばれたなんて理由で喜ぶわけがない。普通に考えれば分かる事だ。しかし盲目的に神を信仰する教会の連中には、そんな普通の思考すらとんと浮かばないのだろう。

狂人に頭のどうこうを問うても意味はないが、イカレると思わずにはいられなかつた。

「ん?」

コナタがイシュタルとエヒトの身勝手さに怒りを抱いてると、手を握られる感触。手を握ってきたのはハジメだつた。握る手が小刻みに震えている。

「ハジメ、大丈夫か?」

「……ごめんねお兄ちゃん。で、でも……もうちょっとだけこうさせて?」

「ああ。落ち着くまで握つてればいい」

コナタの顔を覗き見るハジメの瞳は不安に揺れていた。周り程パニックにはなつてないが、やはり怖いことには変わらない。

いくらオタクで創作物が好きとはいえ、ハジメだつて普通の女の子なのだから。

「まつたく、ハジメは怖がりさんだねー」

そうしてると恵里が茶々を入れてきた。「やれやれ」と肩を竦めてハジメに生温かい視線を送っている。

ハジメは「うつ……」と唸ると、頬を僅かに赤らめた。

「し、しようがないじゃない……。不安なものは不安だもん……」

「別に責めてはないよ。僕はただ、怖がつてハジメかわいいにやうつて思つただけだから☆」

「……え、恵里は不安じゃないの？」

「僕？……不安じやないって言つたら嘘だけど、なるようにならなければならないからねー。」

僕はハジメのかわいい姿を見て気を紛らわすとするさ」

「ううう……っ！…………恵里はいじわるだよ」

「あははっ、ごめんごめん！」

恵里にいじられ、不貞腐れたようにそっぽを向くハジメ。恵里が苦笑しながら謝る。

一見ハジメをからかつてただけにしか見えなかつた恵里の行動だが、ハジメの不安を和らげるためにやつたことだとコナタはすぐに察した。その証拠に握られた手の震えが治まつてゐる。いい感じに気が紛れたということだ。

恵里は嫌いな者には中々容赦ない性格をしているが、その分身内には甘い。自分だって不安なのに、ハジメの不安を拭うのを優先する辺り本当に甘い。甘くていい子である。

「へ? こ、コナタ……?」

恵里の手を握る。握った手は先程のハジメ同様震えていた。やはり無理してたようだ。

「お前達は俺が守る。絶対に生きて帰るぞ」

静かにそう言うと、恵里とハジメが頷き、手を握り返してきた。

未だパニックが収まらない中、光輝が立ち上がりテーブルをバンッと叩いた。その音にビクツとなり注目する生徒達。光輝は全員の注目が集まつたのを確認するとおもむろに話し始めた。

「皆、ここでイシュタルさんに文句を言つても意味がない。彼にだつてどうしようもないんだ。……俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放つて置くなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかも知れない。……イシュタルさん? どうですか?」

「そうですな。エヒト様も救世主の願いを無碍にはしますまい」

「俺達には大きな力があるんですよね？　ここに来てから妙に力が漲つている感じがします」

「ええ、そうです。ざつと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持つていると考えていいでしょな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救つてみせる!!」

何を根拠に大丈夫と言つてるのか分からぬが、無駄に歯を光らせながら、光輝が自信満々に参戦を宣言した。すると光輝のカリスマは遺憾なく発揮され、生徒達は“絶望の中に希望を見つけた”と活気が戻つてくる。

「へっ、お前ならそう言うと思つたぜ。お前一人じや心配だからな。……俺もやるぜ？」

「龍太郎……」

「今のところ、それしかないわよね。……気に食わないけど……私もやるわ」

「雲……」

「えっと、雲ちゃんがやるなら私も頑張るよ！」

「香織……」

いつものメンバーが光輝に賛同する。

「なんかベタな演劇を見てる気分だよ……」

「まあ、実際天之河のノリはそんな感じだもんな」

ともあれ、クラスで最も影響力が高い四人が参戦を宣言した。これにより、後はもう子ガモが親ガモの後ろをついて歩くが如く、自然と他の生徒達も賛同する流れが完成した。愛子が涙目になりながら「ダメですよ～！」と訴えるが、既に彼らに聞く耳はないさうだ。

一種の現実逃避だと、コナタは彼等を見て思う。人という生き物は未知の恐怖に対面した際、解決策を示せる他者に思考停止で従うという心理的性質を持つていて。それが明確な根拠など無い虚像の希望だとしても、それに縋ることで崩れそうな精神を守つては過ぎない。だから深く考えず光輝に追従した。戦争に参加するとは何を意味するのかも理解しようとせずに……。

目だけを動かし、視線だけでイシュタルの姿を捉える。視界に映るイシュタルは、やる気ムード高まる場の雰囲気に満足そうに頷いている。

(狸ジジイが!)

内心でイシュタルに毒づく。

コナタは氣づいていた。イシュタルが集団の中で光輝が一番影響力を持つことを見抜き、光輝がどんな話に反応するのか、どんな言葉に食いつくのか、逐一観察しながら説明していくことを。

その誘導に、光輝はまんまと嵌つた。

人間族の悲劇を語つてた時、魔人族の冷酷非情さ、残酷さを強調して語つてる時なんか特に分かりやすい反応をしていた。

七十もの年月を重ねてきた老齢な教皇からしてみれば、光輝という年若く真懸直ぐな人間は、さぞ分かり易く御し易かつたことだろう。

（天之河は、先生がなんであんなに怒つてたのか分かつてねえのか？ 分かつてないんだろうな……）

迫力がなかつたから、そこそこに聞き流したのかもしれない。戦争は言い換えれば殺し合い——命の奪い合いだ。だから愛子はあんなにも怒つた。自分は年長者で先生だからと、生徒にそんなことをさせるわけにはいかないと、自身の不安や恐怖を必死に押し殺して……。

光輝は真つ先に参戦を宣言したが、彼の覚悟はかなり中途半端なものだろう。いざ魔人族を殺すとなつた時、恐らく彼は殺せない。憶測にはなるが、種族は違えど、魔人族は自分達と同じ——意思を持つた“人”だろうから。でなければ戦争など起ころるはずがないのだから。

まあそもそも、端から自分達に選択肢はないので、結局やることは変わらないわけだが……。

戦争参加を拒否すれば、狂人達が何をしでかすか分かつたものじやない。ただ、碌でもない結果になるのは確実だ。元の世界に戻れず、この世界の知識もない以上は、現状狂人連中の庇護下に入らねば生きる術がない。つまり零が言つた通り、今はそれしか道がないのだ。なら、今は大人しく従う他ない。

ハジメと恵里に目を向ける。

(俺の大切な家族……)

彼女達の命を、絶対にこんな世界に奪わせやしない。奪わせてなどやらない！

彼女達を無事に元の世界に返す為なら、我が身全てを懸ける。

(この手を……いや、全身を血で汚すことになろうと構わねえ。俺は止まらねえ！)

そう、密かに決意を固めた。

コナタ君サイテー！ですよ

戦争参加が決定した後、聖教教会の本山である神山から、麓に位置するハイリヒ王国の王城に移動することになった。

王国では既に受け入れ態勢が整つており、コナタ達は滞りなく王宮に歓迎された。王宮内に入り、そのまま玉座の間に案内される。途中、騎士っぽい装備をした者や文官らしき者、使用人などから期待と畏敬の念を向けられる。“神の使途”的話は、ある程度彼等の耳にも届いているらしい。

彼等から向けられる眼差しに、コナタがうざつたそうに顔を顰める。

(嫌な目だ……。俺達を見るようで見てない。更に先を見てるような、どこか遠くを見てるような……。これは……俺達使徒を通して神を御拝謁してるってか?)

玉座の間に着き扉を潜ると、真っ直ぐ伸びたレッドカーペットの先、意匠を凝らした玉座の前で国王が立つて待っていた。隣には王妃と思しき女性、彼等の子供で姉弟であろう金髪の美少女と美少年が。更には国の重鎮であろう人物など、数にして三十人以上が並んで佇んでいる。

イシュタルが国王の元に悠然と歩いていく。次の瞬間コナタは、予想はしてはいたが

当たつてほしくはなかつた事実を確認した。国王がイシュタルの手にキスをする儀礼をとつたのだ。これで国を動かしているのが“教会”ひいては“神”であることが確定。面倒なことになりそうだと、隣のハジメと恵里と共に内心で溜息を吐いた。

そこからはただの自己紹介だ。国王の名をエリヒド・S・B・ハイリヒといい、王妃をルルアリアというらしい。金髪美少年はランデル王子、王女はリリアーナという。

後は、騎士団長や宰相等、高い地位にある者の紹介がなされた。途中、王子の目が香織に吸い寄せられるようにチラチラ見ていた。どうやら異性に対する認識は異世界でも変わりないようだ。

その後、晩餐会と称し異世界の料理が振舞われた。見た目は地球の洋食と大差なかつた。たまにピンク色のソースや虹色に輝く飲み物など珍妙な食べ物も出てきたりしたが、味は思いの外美味しかったのが意外だった。

ランデル殿下がしきりに香織に話しかけていたのをクラスの男子がやきもきしながら見ているという状況もあつた。当の香織は、小さな殿下が自らに寄せる想いなどまるで気付いていなかつたが。

コナタ、ハジメ、恵里の三人は現在テラスで夜風に当たつていた。

コナタがテラスに出たところを二人が追つてきた形である。

「別に俺に付き合わないでもいいんだぞ？」

「ボク達も休憩しようと思つてたところだから」

「それにあそこにいたんじや、色々話しかけられてめんどくさいしねえ？」

そう言つて中の様子を覗く恵里にコナタとハジメも続く。

中では同じく晩餐会に参加している貴族等が、生徒達に積極的に話しかけていた。褒められ、おだてられて調子に乗つていたり、美男美女に話しかけられ顔を赤くしている生徒達は、皆一様に悪い気はしてないのが見て取れる。

「なるほど」

さもありなんと苦笑するコナタ。

グラスを呷り、ふとテラスから外へ広がる世界に意識が向いた。視界の先には日本とはまるで違う、ゲームで見るような景色が広がっている。

「ツ……」

否応なくここが地球ではないのだと実感させられる。厄介事に巻き込まれたことを

思い知らされ、ギリツと歯噛みした。

「コナタ／お兄ちゃん……」

ハジメと恵里が心配そうに呟く。

二人のいる位置からコナタの顔は窺えないが長年の付き合いだ。彼が今どんな表情をしているのかなんとなく察していた。

「晩餐会は楽しんでおられますか？」

「ツ！」

「お、王女様？」

不意に後ろから声を掛けられた。突然の第三者の声にハジメの肩が跳ね、恵里も多少驚いた様子で振り返る。

そこには先程自己紹介されたりリリアーナ王女がいた。人好きのする笑顔を湛え、金糸のごとき艶やかな髪を靡かせ歩み寄ってくる。彼女はなるほど王族らしい。歩く様一つとっても気品に満ち溢れている。初めて見る本物の気品は、同性であるハジメと恵里をして魅せられるには十分な威力を秘めていた。

「王女様が俺達に何か用かい？」

ただ一人、コナタだけは意に介した素振りも見せずリリアーナに問いかける。

むしろ能面のような無表情を張り付け、抑揚のない口調で質問をしてきたコナタに、逆にリリアーナの方が気後れし一瞬足が止まりかける。しかし、氣を入れ直し再び歩みを進め気丈に答えてみせた。

「はい。あなた方とはまだお話できてませんでしたので、ぜひお話をしたいと思いまし

て

リリアーナは既に他の生徒達全員と会話をしてきた。彼女は非常に真面目で温厚な人間だ。故に生徒達も、王族でありながら飾らず気さくに話しかけてくれたりリアーナにすぐに信頼を寄せていた。

コナタはどうかというと？

「俺はあんたらと馴れ合う気はない。話すこともない。なんでお引き取り願おうか？……ああ、二人は何か話したいことがあるなら話すといい」

にべもなかつた。

召喚された者で、彼女の美しさに中てられなかつた人物はこれで二人目である。一人目とは光輝の事だが、リリアーナはコナタと光輝の気風はまるで正反対の印象を受けた。

「だ、ダメだよお兄ちゃん！ 王女様に向かつて！」

「ちよつ、コナタ……今のは僕もどうかと思うけど……」

「よいのです、お二人共」

王族の人間をすげなく追い返そうとする彼の言動に、流石にそれはまずいとハジメと恵里が待つたをかける。しかし二人に対しやんわりと言葉を返したのは、ぞんざいに扱われたりリアーナの方だつた。まさかの方向からのまさかの返答に、ハジメと恵里は口

をぽかんと開けて呆けてしまう。二人はまだ知らないから仕方ないことだが、リリアーナはある程度で機嫌を損なう程狭量な器ではない。それに彼女自身、彼の態度はここに来る前から少なからず覚悟していたこともある。彼女がテラスにやつてきたのは、三人と話すことと別にコナタ個人にも用があつたのだ。

「一つ、伺つても？」

今がその時とリリアーナは笑顔をしまい、真剣に、誠実に、コナタへ質問の了承を問う。

対するコナタは無反応。能面のまま是非の返答も無し。普通なら、次の行動をどうすればいいのか悩み委縮してしまうところだ。

しかしリリアーナは違つた。彼女はコナタの無言を是と受け取つた。もし答える気がないなら、率直に否とだけ答え追い返すはずだ、と。彼女の推察は正解。大した気位の持ち主である。

ならばと二の句を発するリリアーナ。

「……あなたは、私達のことが嫌いなのでしょうか？」

これこそが、リリアーナの尋ねたかったこと。

晩餐会が始まり生徒達にすり寄る貴族達だつたが、実はコナタには一人も声をかけていない。なぜか——度胸がなかつたからだ。

見た目からして威圧感のあるコナタの風貌、それにプラスして彼が放つ“近寄るなオーラ”とも呼ぶべき苛烈な雰囲気に尻込みし、誰もコナタに近寄れずにいた。その光景を彼女は目撃していた。加えて先の応対だ。リリアーナがそう感じたのも必然と言えた。

「あれを見な」

コナタが質問への回答代わりにある方向を指差す。示した先は晩餐会場。窓越しに分かり易く高ぶつた生徒の様が窺える。さんざん持ち上げられてものの見事に舞い上がりつていた。

だが、今注目すべきは生徒ではなく貴族の方。貴族の表情を見ながらコナタは言葉を続けた。

「奴らの心境を当ててやる。“ああ、これで私達も子供も戦争に参加せずに済む。死なずに済む”だ」

「…………そ、それは」

「気づいてないとでも？　見縫んなよ。“人間族の希望”だの“我々は救済を望んでいる”だの聞こえのいいことを言つてるが、要は荒事全部俺達に丸投げして、自分達は安全圏に籠つてようつてことだろ。せいぜいする事つつたら俺達のご機嫌取りぐらいか？」

コナタの口から発せられる恨み節の数々。それを淡々と告げられるのは、ある意味不気味だ。

「も、申し訳ございません。……ですが、私達では魔人族には——」

「この子達もあいつらも本来戦う力なんて無えよ。当たり前だ。俺達は言わば民衆だ。平和な国で平和に過ごしてただけの一般人だった。それが急に何処とも知らねえ場所に呼び出されて“あなた方は力を得ました。だから最前線で戦つてください”ときた。そんな死刑宣告と変わらねえもんを、奴らは積極的に押し付けてきやがる。それで俺が好感を抱くと、お前はそう思つてんのか？」

更なる恨み節が突き刺さり、リリアーナの体が強張る。

口調はあくまで平淡。表情も変わらず能面。だがキレているのは明らかだつた。言葉の途中、持つていたグラスを無意識に握り潰したのが何よりの証左だ。

「……いえ、思いません。心を汲まぬ失礼な問い合わせでした。皆様には申し開きのしようもございません……。我々の勝手で関係の無いあなた方を巻き込み、戦場などという死地、に引っ張り出して、しまつて…………ツ！」

謝罪の言葉を紡ぐリリアーナの目に少しずつ涙が溜まつてくる。

ドレスを皺が出来るほど握りしめ、ついには嗚咽ばかりが漏れ言葉が出なくなつてしまふ。

「本当に、ごめんなさい……ごめん、なさい……っ！」

それでもなんとか絞り出して出てきたのは、年相応な少女の心からの「ごめんなさい

」だった。

泣きながら頭を下げるリリアーナを見て、今まで口を挟めず黙っていた二人から「どうするの？」と視線を投げかけられる。

やがて苛立ちからか頭をガシガシと乱暴に搔き、コナタは未だ頭を上げようとしているリリアーナを見据え口を開いた。

「頭を上げてくれ、王女様」

「……ですが」

「いいから」

その言葉に漸く頭を上げるリリアーナ。

そうして頭を上げたリリアーナは瞠目した。コナタの表情に確りと感情が乗つかつていたからだ。

それだけでも面食らったというのに、次の瞬間さらに驚かされることになった。

「悪かった」

「あ、えつ……？」

コナタが謝罪と共に頭を下げたのだ。綺麗な斜め45度。最敬礼というやつである。

頭を下げられた理由が見当もつかないリリアーナは、流れる涙を拭うことすら忘れて困惑した。

「な、なぜ……。あ、頭を上げてください！　あなたが私に頭を下げる理由などないはずです！」

「理由ならある」

素直に頭を上げ、コナタはバツが悪そうに理由を述べる。

「俺がしたのは八つ当たりだ。それも相手が言い返せないのをいいことに醜い感情を一方的にぶつける、一番恥ずかしい類の」

「だ、だからって、そんな……」

戸惑いは晴れない。理由は分かつた。しかし仕方ないことだ。言われて当然なのだ。コナタがぶつけてきた言葉は、何もかも正論だつたんだから。

「正論だつたとしてもだ。……あなたが他の貴族とは違つてちゃんと俺達個人を見て、気を遣つてくれてんだつてことはすぐに分かつた。なのに俺は自分の感情を優先して拒んだ。向けられた優しさを蔑ろにして感情をぶつけた。謝る理由としちゃ十分だろ」絶句するリリアーナ。

たとえそうだとして、こんな状況で自分の非を素直に認め謝ることができの人間など、果たして何人いるだろうか？

「王女様に泣いて謝られて一気に頭が冷えたからな。したらやることは一つだ」
悪いことをしたら謝る。良くしてもらつたら礼を言う。人としての常識をちゃんと
出来る人間でありたいんだと、コナタは笑顔で言つた。

能面とのギャップが凄すぎたからか、はたまた別の理由か定かではないが、コナタの
笑顔からリリアーナは目が離せなくなる。

と、横からハジメが苦笑混じりにリリアーナにハンカチを差し出した。

「驚かせてごめんなさい。お兄ちゃんつて変に律儀なところがあつて。あつ、良かつた
らこれでお顔拭いてください」

「あ、ありがとうございます……」

「あれはコナタが自己満足でやつたことなんで、王女様は気にしないでいいですよ」

「事実だけど言い方あ……」

どうやら一連の流れで彼女達のリリアーナへの緊張は吹つ飛んだようだ。さつきま
での張りつめた空気は何だつたやう。何とも緩い空気が流れ始めていた。

その空気に触れ、リリアーナも少しずつ余裕を取り戻していく。ハジメに渡されたハ
ンカチで涙を拭い……ふと視界の端でキラリと何かが光つた。コナタが握り潰したグ
ラスの破片である。

リリアーナの顔からサッと血の気が引いていく。ガラス片が刺さり大惨事になつた

コナタの手を想像したのだろう。

「大変！ 急いで治療しないと！」

「治療？」

突然の治療発言に訝しむコナタにリリアーナが慌てた様子で詰め寄り、彼の腕を取り手のひらを開かせる。

「…………あ、あれ？」

直後に間の抜けた声が出た。無理もない。そこには想像とかけ離れた傷一つない手があつたからだ。

綺麗な碧眼がコナタの手とガラス片を行ったり来たり。目の前で起きている不思議体験に、リリアーナは頭の中で？を量産した。

「そういうことか」

得心し苦笑を溢すコナタ。

「俺の体は普通より多少頑丈でな。このくらいじや傷一つつかねえさ」

「そ、そうだつたのですね」

「ぎにぎ

「ああ、だから安心してくれ」

「は、はい……良かつたです」

「こねこね

」「…………」

「にぎにぎ

「…………なあ、王女様」

「は、はい…………なんでしょう？」

「こねこね

「手…………くすぐつてーんだけど…………」

「…………へ？」

手慰み感覚で手をにぎにぎこねこねしてくるリリアーナにコナタがそう言うと、リリアーナが再び間の抜けた声を発した。

「王女様つてば、意外と大胆なんだねえ」

「あはは……」

横では恵里が「むふふ」と小悪魔チックな笑みを浮かべ、ハジメが苦笑を浮かべながらリリアーナを見ている。

視線を戻す。リリアーナの両手は未だコナタの手をにぎ（略）していた。

「くくくくツツ!!」

やつと自分が何をしているのか認識したリリアーナの顔が一瞬で茹蛸になり、熟練さ

れた戦士もかくやという勢いで後退る。完全に無意識だつたようだ。

「ババババめんなさい！ 私つたら何をして……っ！」

「あー……うん。俺は気にしてねえから。だからそんな頭下げまくんないでくれ」
さつき以上に猛烈に頭を下げるリリアーナにコナタが困った表情で静止を促す。
王族の人間が頭下げ過ぎじやね？ と心配になるレベルだ。

「はう……皆様にはお恥ずかしいところを見せてばかりです……」

「でもそのおかげで僕達は親近感わきましたよ？ ね？」

「うん、そうだね」

「そ、そうでしようか？」

「ま、取つ付きにくいよかマシだろ。俺らとしちゃ救われた気分だし」

「え？」

「何でもない。気にしないでくれ」

「は、はい」

沈黙が降りる。されど最初のよくな険悪な雰囲気はなく、穏やかそのものだ。

「さて、王女様はそろそろ戻つた方がいいんじやねえか？」

「ええ、そうします。その前に、皆様のお名前を伺つてもよろしいでしようか？」

「南雲コナタだ」

「妹の南雲ハジメです」

「中村恵里つていいます」

「コナタ様、ハジメ様、恵里様ですね。今後、何かご相談などございましたら遠慮せずに仰つてください。私が出来る事なら喜んで力を貸しますので」

「ああ、そうさせてもらう」

「それでは失礼致します」

ふわりと柔らかな笑みを湛え優雅に一礼し、リリアーナは戻つていった。

リリアーナの姿が見えなくなるまで見送ると、ハジメと恵里がほうつと息を吐く。

「コナタ、あんま無茶なことしないでよ。あんな王女様に喧嘩売るような……」

「ホントだよ！もう心臓止まるかと思つたじやない！」

「悪かつたよ。俺もまさか泣き出すとは思わなかつたぜ」

「そこじゃない！」

揃つてツッコミを入れる。リリアーナが寛容な性格だったから良かつたものの、コナタの発言は下手すれば不敬罪と捉えられるものだった。

「それは問題ないだろ」

「なんで？」

「俺達が神の使徒だからだ」

「……あ」

「どういうこと?」

簡潔に述べたコナタの言葉の意図を恵里が察する。ハジメは理解に及ばなかつたようで首を傾げた。

「国を動かしてるのは神で、俺達は神が遣わした存在。それを当てはめれば、立場は國の人間より俺達の方が上だ。目に余る行動が続いたり、神の意思を踏み躡るような発言をすれば教会から異端認定されるだろうが、俺のは大きく見れば貴族達に対する小言。なら不敬罪に問われる謂れもねえ」

説明を受けハジメも「なるほど」と頷いた。

「しかし彼女と話せたのは、結果的に良い収穫だつたな」

コナタの言葉に二人も頷いてみせる。

収穫とは、先ほどコナタが言つた救われた気分というのに繋がる。

トータスに召喚され数時間、三人はある懸念を抱いていた。それは信徒全員が狂信者である可能性だ。

何をバカなと思う話だが、説明を聞き、この世界の歪さに危機感を抱いたコナタ達は可能性を捨てきれずにいた。
それを覆してくれたのがリリアーナだ。

彼女が泣いたのは決してコナタが恐かつたからじやない。本気で罪悪感を覚えていたのだ。コナタ達を巻き込んだことに本心から心を痛め、申し訳なさから涙を流し頭を下げた。

そんなリリアーナの存在が、トータスにも神の意思や信仰に囚われ過ぎず、確りとした個としての意思を持った人間もいるのだと教えてくれた。それで少しではあるが、精神的に余裕を得ることが出来た。

三人にとつてリリアーナは、確かに救いになつたのだ。

晚餐が終わり解散になると、各自に一室ずつ与えられた部屋に案内された。豪奢な部屋に天蓋付きのベッドを見てコナタの顔が一瞬引きつるが、「まあ城なんだしこんなもんか」と深く考えるのはやめることにした。

ベッドに入る直前、部屋が豪華すぎて落ち着かない、ハジメと恵里がコナタの部屋に押しかけてきたのは完全な余談である。

ステータス公開ですよ

人殺し

化け物

貴様さえいなけれど

死ね

死ね 死ね 死ね

——死ね!!

「……っ」

小さな呼気と同時に瞼が開く。いかにも高価そうな天蓋が視界に飛び込んだ。少しの間呆けて、思い出したように咳く。

「……誘拐されたんだつたな。クラス丸ごと……」

周りはまだ薄暗い。

時計を確認する。

「三時……」

身体を起こし両隣を見やる。ハジメと恵里がコナタの方に身を寄せ穏やかな寝息をたてている。コナタが身を起こしても起きる気配はない。

よほど疲れがたまっていたのだろう。昨日は色々あつたのだから無理もない。頭を軽く撫でてやると、心地よさからか二人の寝顔が嬉しそうに緩んだ。それを見てコナタも薄く微笑む。

「うつ…………！」

つと昨日の朝より遙かに大きな不快感が胃からこみ上げてきた。こみ上げるモノの強さに、たまらず小さく呻き声を発し口を押える。どうやら今日の分で精神的キャパシティを超えたようだ。昨日のように幸せ成分で上書きも出来ないらしい。

ゆっくり、しかしながらベッドから抜け出す。

せつかくぐつすり眠っているのだ。起こすのは忍びないし、無用な心配をかけるわけにもいかない。

部屋に備え付けられた洗面台まで向かい、胃の中のモノを洗いざらいぶちまけていく。

ひとまず収まりを見せ、それでも長年の経験から全て出し終えた感覚がしないため、コナタはしばらく洗面台に顔を伏せる。

暫くすると背中を左右から擦られる感覚。なるべく声や音は出さないように注意していたはずだが、それでも二人は起きてしまったようだ。

「大丈夫、コナタ？」

「ああ……悪いな、起こしちまつたみたいで……」

「ボク達のことは気にしないでいいから。背中擦つてあげるから、お兄ちゃんは全部出してスッキリしちゃお？ ね？」

「…………ありがとう」

横目でチラッと見えたハジメと恵里は、慈愛に満ちた優しい表情をしていた。

朝食を終えると、訓練と座学が始まった。

まず、各自に十二センチ×七センチ位の銀色のプレートが配られる。不思議そうにプレートを見る生徒達に、騎士団長メルド・ロギンスが直々に説明を始めた。

騎士団の団長が訓練とはいえ彼等に付きつきりでいいのかと言う疑問もあつたが、対外的にも対内的にも『勇者様一行』を半端者に預けるわけにはいかないということらしい。なるほど納得できる理由である。

メルド本人もなかなか豪快な性格らしく、むしろ「雑事を副長に押し付ける理由ができて助かった！」と笑っていたくらいだ。副長さんにとっては笑い事じやないだろうが。これにはコナタも哀れに思い、顔も知らぬ副長さんに心の中で合掌だけしておいた。

「よし、全員に配り終わつたな？　こいつはステータスプレートって言つてな、文字通り自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるつて優れモノだ。でもつて最も信頼のある身分証明書もある。これがあれば迷子になつても平気だから失くさないよううにしろよー？」

非常に気楽な喋り方をするメルド。彼は豪放磊落な性格で、「これから戦友になろうつてのにいつまでも他人行儀に話せるか！」と、他の騎士団員達にも普通に接するよう忠告するくらいだ。

その潔い性格は、コナタにリリアーナ程ではないにしろ信用に足る人物であると高評価を受けさせた。

「プレートの一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を作つて魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録される。『ステータスオーブン』と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。ああ、原理とか聞くなよ？ そんなもん知らないからな。神代のアーティファクトの類だ」

アーティファクトとは遙か昔、神代に作られた強力な力を持つた魔法具のことで、現代では再現不可の国宝なのだと。ただしステータスプレートだけは複製するアーティファクトもセットで存在するので、唯一一般にも流通しているアーティファクトとのこと。

説明を聞き終え指先に針をチヨンと刺し、プクと浮き上がった血を魔法陣に擦りつける。すると魔法陣が一瞬淡く輝いた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

南雲コナタ 17歳 男 レベル：---

天職：掃除屋

筋力：1

体力：1

耐性：1

敏捷：1

魔力：1

耐魔：1

技能：言語理解・???

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

コナタのステータスが表示される。見事に1が並んでいる。どう考えても一番低い数値のはずだ。レベルに至つては非表示になつてている。イシュタルの話では、自分達の力はこの世界の住人の数倍から数十倍あるはずだが。

「どういうことだろうな。それにこの天職……」

しかしそれよりもコナタの目を引いたのは天職だつた。

——掃除屋

一般的に清掃員などを指す単語だが、殺し屋など裏世界の住人の暗喩として使われることもある。むしろ漫画等のフィクションでは後者の意味合いでよく使われるものだ。

(なんか引っかかる……。漫画とかでもよく見る単語だけど、その時は特に何も感じなかつたのに……。何というか……しつくりくる……?)

今までこんな感覚に襲われたことがあつた。

例えはコナタのペンネームである“東雲彼方”。自らの名前をもじつて付けたものだが、その際も妙にしつくりきたのを思い出す。ピタリと嵌つたというかどこか懐かしい感じがしたのだ。今回もそれに似ていた。

「お兄ちゃんのステータスはどうだつた?」

思索に耽つているとハジメが尋ねてくる。ちよつとホクホク顔だ。結構いいステータスだつたのだろうか?

「僕も興味あるな。コナタの事だから、すつごいチート持つてそう」「見せつこするか?」

恵里も興味津々と近づいてきたので三人で見せ合うことに。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

南雲ハジメ 17歳 女 レベル：1

天職：鍊成師

筋力：10

体力：10

耐性：10

敏捷：10

魔力：10

魔耐：10

技能：鍊成・言語理解

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

中村恵里 17歳 女 レベル：1

天職：降霊術師

筋力：15

体力：35

耐性：40

敏捷：20

魔力：85

魔耐：85

技能：降霊術・魂魄感知・火属性適性・氷属性適性・闇属性適性・全属性耐性・複合

魔法・魔力回復・言語理解

＝＝＝

「なんかお兄ちゃんのステータス変じやない？　ていうか恵里、魔力と魔耐が異様に高いし技能も多い。……あれ、これつてもしかして……」

「たぶんハジメの数値は一般平均なんじゃないかな……」

「や、やっぱりそう……？」

「……い、いや、わかんないよ？　もしかしたら1が平均かもだし。それにしたってコナタのはツツコミどころ多すぎるけど……」

「だよね……」

「試してみるか」

コナタのステータスに二人は有り得ないという表情を浮かべた。

試しにと近くに落ちていた手ごろな石を二つ拾い上げ、ハジメと恵里に放る。

「お兄ちゃん？」

「それを思い切り握つてみてくれ」

そう言うと、二人は意図を汲んで思い切り石を握りしめる。「ふぬぬー！」という声を出し、固く目を瞑つて力を籠るためにプルプルと震える姿は実に可愛らしい。念のため言つておくが、別にこれが見たいからやつてもらつたわけでは断じてない。

やがて全力を出し切つたのか、力を緩めてフウツと息を吐く二人。手を開くと石は渡

した時の状態を保つていた。

「うーん、欠けすらしないや」

「僕も同じく」

「ふむ……二人共ありがとな。その石もらえるか?」

返された石を握り、少しづつ手に力を籠めていく。

石は容易く握り潰され、砂となつてサラサラと手から零れ落ちた。

「わー……あいつかわらずの馬鹿力だねえ……」

「これで筋力1は無理があるんじやないかな……」

「考えられるのはプレートのバグだな。別にこのままでいいけど、とりあえず団長さんに報告だけはするか」

ここでメルドから追加の説明が入った。

レベルはRPGのように、魔物を倒しただけで上昇するということはないらしい。地道に腕を磨くことでステータスを上げると、それに応じてレベルが上がるシステムのようだ。

そして天職。天職は主に戦闘系と非戦系に分けられ、戦闘系は千人に一人、場合によつては万人に一人しかいないとのこと。非戦系は、百人に一人か十人に一人くらいらしい。

そしてステータスの値だが、レベル1の平均値は10前後とのこと。それを聞いた瞬間、ハジメの表情が絶望に転じた。メルドは全員に期待に満ちた目を向けている。

最初に報告したのは光輝。天職は勇者で、レベル1の段階でパラメータオール100に様々な技能持ちと、正に勇者らしいステータスだった。

（天職が勇者つてなんか嫌だな。そもそも勇者は職業なのか？　いや、某代表的RPGでは職業：勇者もあるけども）

その後も続々とメルドに報告していく面々。どれも戦闘系天職ばかりで、光輝には及ばないものの十分チートと呼べるステータスだった。

いよいよ恵里、コナタ、ハジメが報告する番となりメルドの元に向かう。今まで規格外のステータスばかり確認してきた彼の表情はホクホクだ。

まずは恵里が報告する。

「ほお、これまたすごーいな。降霊術師は死者の残留思念を汲み取つたり遺体を動かしたりできたりと、闇魔法を主体とした上級職だ」

「死者の残留思念……遺体を動かす……。なんか裏切者とかが使いそうな力みたいでやだな……」

恵里が戦闘系上級職持ちであつたことに嬉しそうなメルドとは対照的に、降霊術師の能力説明を聞いた恵里は浮かない表情を見せる。

少し沈んだ様子の恵里にコナタが声を掛けようとするが、その前に小さな影が恵里に近づいた。——鈴だ。

「大丈夫だよエリリン！ エリリンは自分の思つたことはズバババーン！ って言える裏表のない性格だつて鈴は知つてるもん！ そんな恵里が裏でこそ悪く事するわけない、でしょ？」

「鈴……」

屈託のない笑顔で恵里への大きな信頼を込め断言する親友に恵里は目を丸くする。恵里が南雲家以外でかけがえのない存在に出会えたことに嬉しく思いつつ、コナタは鈴の頭に手を乗つけて恵里に言つた。

「谷口の言う通りだぞ恵里。それに天職どうこうで敵も味方もないさ。力をどう使うかなんて、結局本人の意思次第なんだからな」

「そつか、そうだよね。僕が君達を裏切るなんて有り得ないし気にする必要なんかないよね！」

「そういうこつた」

鈴とコナタの励ましに恵里が吹つ切れた様に笑顔を返す。

「……ところでコナタンはいつまで鈴の頭に手を置いとく気かな？」

「あつすまん。ちょうど置きやすい位置に頭があつたもんでつい」

「鈴をチビと申したか。よろしいならば戦争だ！」

「……そろそろいいか？」

「あ、はい、すみません」

後ろで「ちよつとは鈴に身長を分けろこんにやろー！」とか「はは、小動物の攻撃なんて痛くも痒くもないぞ」といった親友と幼馴染の声をBGMに、メルドの方に意識を戻す。

「いい奴らじやないか。大事にしろよ？」

「言われなくともですよ」

コナタ達の方を微笑ましそうに見ていたメルドが恵里の即答にさらに笑顔を深めた。

「さて、続きだが、とんでもない技能まで持つてるな」

「とんでもない技能？」

「これだ」

メルドが指したのは“魂魄感知”的技能。

読んで字のごとく魂を感じる技能で、突き詰めれば対象の魂の揺らぎから虚実を把握する事すら可能になるらしい。かつてこの技能を持っていた者は、若くして司教の座に上り詰めたりなど目覚ましい功績を残してきたそうだ。

「お前の今後の活躍に期待してるぞ！」

ステータスプレートを恵里に返しながらメルドは良い笑顔でサムズアップした。

次にハジメがプレートを渡す。するとメルドは「うん?」と笑顔のまま固まり、ついで「見間違いか?」というようにプレートをコツコツ叩いたり、光にかざしたりする。そしてジッと凝視した後、もの凄く微妙そうな表情でプレートをハジメに返した。
「あー、その、なんだ。鍊成師というのは、まあ、言つてみれば鍛冶職のものだ。鍛冶をするときに便利なんだとか……」

メルドが歯切れ悪くも説明する。まさかこんなザ・平均が出てくるとは思つてなかつたんだろう。ハジメの天職は非戦系、戦闘には向かない職業だ。戦えないこともないだろうが、戦闘時に役立たずになる可能性は高い。

「メルド団長。これ、俺のステータスなんすけど」

「お、おお……っ! どれ、見せてみろ!」

場のよくない雰囲気を察知したコナタが、鈴との戯れを終え続けざまステータスをメルドに報告する。

コナタからの報告にメルドは、「助かった!」といつた表情でステータスプレートを受け取る。そして再び凍り付いたように笑顔のまま固まった。

「え、えー、その……ちょ、ちよつと待て! これはステータスプレートが壊れてるはずだ! すまないが、もう一度試してもらえるか?」

「まあ、いいっすけど」

どうしても信じられなかつたようで、コナタに新しいステータスプレートが渡され、再度血を擦り付けステータスの開示を行う。

「……変わらないな」

「つすね」

結果変化なし。同じ内容が新しいプレートにも刻まれた。

「こんな天職は知らんぞ……。レベルも非表示になつてるし、隠蔽された技能もある。何より……このステータスは……」

「俺は気にしませんよ。これでも身分証にはなるんすよね？」

「あ、ああ。まあ、それぐらいにはなるが……」

「ならないです」

ステータスプレートを返してもらう。コナタの淡泊な答えにメルドは少し呆然とした。

元々自分の能力を数値付けされるのに気乗りしなかつたコナタとしては、むしろこの結果は好都合だつた。

しかしそれで終わりとはいかず、いかにも小物っぽい雰囲気を纏つた軽薄そうな男が近づいてくる。名を檜山大介と言い、取り巻きである斎藤良樹、近藤礼一、中野信治を

引き連れてきた。

檜山は香織に惚れており、香織に構われるコナタを四人で袋にしようと突つかつたところ、見事返り討ちにされた過去を持つ。それ以来恐怖を刻まれ遠巻きに睨むことしかできなかつた彼等だが、メルドの反応からコナタのステータスが酷いモノだと小物特有のセンサーが嗅ぎつけたようだ。いやらしい笑みを浮かべながら、ここぞとばかりに突つかつてくる。

「オイオイ南雲。どんな天職かも分からないつて、そんなんはどうやつて戦うつもりなんだよお？　妹の方も非戦系みたいだし？　無能つて言葉はお前等のためにあるんだよなあ～？」

うざつたい口調で檜山が肩に手を乗せてくる。やつと仕返しが出来ることにテンションが上がつているのか、香織や零、コナタの中學時代からの級友など、周りからの視線が冷ややかになつていて、氣付く様子はない。

「ちょっとステータスプレート見せてみろよ。天職がショボい分、ステータスは高いんだろ？」

「見たいなら勝手に見ろ」

粘着質すぎてキモイため、離れさせるためプレートを投げ渡す。

そうしてしばらく眺めた後、檜山達は爆笑した。

「ぶつはははは、なんつだこれ！ 超貧弱！」

「ぎやはははは、こいつ赤ちゃんより弱いぜ絶対!?」

「だははははは、見ろよ！ 妹の方も完全に一般人だぜ!! 兄妹揃って弱すぎっしょ！」

「無理無理！ 直ぐ死ぬつてコイツら！ 肉壁にもならねえよ！ つーか兄貴の方の天職はゴミ清掃員にでもなるつもりなのかな〜!? ヒアハハハ〜！」

今までの鬱憤を晴らさんと、コナタとついでに妹のハジメを嘲る小物四人衆。周りでは中学組以外の連中も爆笑なり失笑なりしていく。もう我慢の限界とばかりに香織や零が憤然と動き出そうとするが、コナタは彼女達に掌を向け静止を促すと、いつの間にやら取り返していたステータスプレートをかざしてみせた。

「ほら、ハジメ」

「あ、……うん」

「なつ！？ い、いつの間に!?」

「こんな場所に来てまでねちつこくマウント取りとか、本当に下らねえ連中だ。さすがはイジメ界の粘着セロハンテープつてか？ 小物臭極まつてんな」

「つ!? 誰がセロハンテープだ!? キモオタが吐かしてんじやねえぞ!!」

「確かにセロハンテープに失礼か。便利なあれと違つて、お前らはただただ害悪に尽き

る

「てめえ……！」

いつステータスプレートを取り返されたのか分からず驚愕を露にする檜山だつたが、続くコナタの挑発に激昂し顔を真っ赤にして食つて掛かる。

それを光輝が見かね止めに入つた。

「やめろ！ 仲間同士で争つても意味はないだろう！」 南雲、心配して声をかけてくれ

た檜山達に対してもんてことを言うんだ。今すぐ謝るんだ」

ただ止めるか喧嘩両成敗にすればいいだけなのに、なぜかコナタを一方的に非難する光輝。それも言い分はかなり的外れだ。

コナタは冷めきつた瞳で光輝を一瞥し、すぐに興味も失せたと視線を外した。

「おい、無視するな！」

コナタの態度が気に食わなかつたのか、後ろから光輝が肩を掴もうとする。

「俺に触んなクズが」

「ぐつ！」

それをすんでのところで振り返つたコナタが、光輝の手首を掴み返して阻止する。先ほど石を碎いた時とは比較にならないぐらい弱く握つたのだが、それでも痛みを与えるには十分だつたようで光輝は苦悶の声を上げた。

手を離すと光輝が手首を抑えコナタを睨みつける。檜山は下衆な笑みを浮かべ光輝の後ろに着いた。光輝と一緒に攻め立てようという腹なのだろう。実際に小物極まりないムーブだ。

「こらー！ 嘘噏はやめなさーい！ 仲間同士で争い事なんてしちゃダメですよ！」

「そうだな。そろそろやめとけよお前達。というかなんで仲裁に入つたお前まで険悪になつてるんだ……」

重苦しい雰囲気が流れ出したところで、愛子とメルドが待つたを掛けた。腕をブンブン振りながら、ちっこい体で必死に三人を仲裁しようとする愛子。メルドも木乃伊取りが木乃伊になつた光輝に呆れながらも注意に入る。この時コナタの中で、光輝にも平等に注意できる人物としてメルドへの評価がかなり上がつたことをメルド本人は知らない。

横槍が入り毒気を抜かれた檜山が舌打ちをしながら離れていく、光輝は零の指示を受けた龍太郎に引っ張られていく。

檜山と光輝が下がつたことで、もう大丈夫だろうと判断した愛子がコナタとハジメに向き直り励ますように背中を叩いた。

「南雲君、南雲さん、気にすることはありませんよ！ 先生だつて非戦系？ とかいう天職ですし、ステータスだつてほらつ、ほとんど平均ですから！」

提示される愛子のステータスプレート。

|||||||

畠山愛子 25歳 女 レベル：1

天職：作農師

筋力：5

体力：10

耐性：10

敏捷：5

魔力：100

魔耐：10

技能：土壤管理・土壤回復・範囲耕作・成長促進・品種改良・植物系鑑定・肥料生成・

混在育成・自動収穫・発酵操作・範囲温度調整・農場結界・豊穰天雨・言語理解

|||||||

ハジメは死んだ魚のような目になると「あははつ、皆凄いなあ」と乾いた笑みを浮かべながら、どこか遠くに意識を持つていかれた。

確かに非戦系だ。だが魔力は光輝に匹敵しているし、なにより愛子の天職は作農師。戦時下において兵力と並ぶほど重要とされる糧食問題を解決できるだろう超レアモノ

だつた。付隨されたスキルも、考え得る限り完璧だ。

愛子の天職を知つたメルド達も当然騒ぎ出し、俄かに慌ただしくなる。

「先生。先生も十分チートですよ」

「えつ？」

「あらあら、愛ちゃんたら止め刺しちやつたわね……」

「は、ハジメちゃん大丈夫!?」

「ハジメンが死んだ!?」

「この人でなし！ つてネタはともかく、思いもしない方向から止めが来るとか……愛ちゃんもなかなかえぐいことするねえ……」

「えつ、えつ……？」

固まつたハジメとコナタ達の苦笑交じりの言葉に、愛子は「あれえ～？」と可愛らしく首を傾げていた。